

太平記を読む会第2回例会

2018年7月2日

第二回例会は六月十八日の予定でしたが、当日朝、大阪北部を襲った強い地震で、京阪神一円が交通マヒに陥ったため、中止し、一週間遅れの開催となりました。急な変更にも拘らず、初回参加者十名のうち九名が出席、後醍醐天皇の主な皇妃、皇子の系譜を学んだあと、第二巻の輪読を進めました。元弘の乱（一二三一年）が始まる緊迫した時局を辿りましたが、最後のくだりを読み残しました。

◇この日輪読した第二巻の個所は次の通りです。

(一) 南都北嶺行幸の事

行幸の狙いは比叡山の懐柔（p74〜77）

元徳2年（1330）、後醍醐天皇は南都の東大、興福両寺と比叡山に相次いで行幸した。比叡山では焼失した大講堂の復興供養が後醍醐の皇子、尊雲（護良）、尊澄（宗良）両法親王の先導で華々しく挙行された。だが、真の狙いは衆徒を討幕戦に動員する下工作。幕府も疑いを抱き、宮中で幕府調伏の祈祷が行われたのではないかとの嫌疑も含め、まず、後醍醐側近の僧侶を六波羅に連行して、本格的な取り調べに入った。

(二) 為明卿歌の事

(三) 両三の上人関東下向の事

(四) 俊基朝臣重ねて関東下向の事

日野俊基を首謀者として鎌倉へ連行（p85〜86、

p89〜90）

幕府は俊基が討幕陰謀の首謀者と断定して、鎌倉に連行。太平記はその旅を華麗な道行文で綴っており、当時の東海道の道筋を知る貴重な史料となっている。
*中世の東海道 古代や近世の東海道は近江草津から鈴鹿峠を越え、伊勢経由で尾張に入るルートを指した。しかし、俊基一行は湖東を北上して不破の関から美濃路経由で尾張に出ている。中世の旅は、この美濃回りが普通で、鈴鹿越えはあまり使われていない。

(五) 長崎新左衛門尉異見の事

幕府、天皇の遠流と近臣の処刑を決定（p91〜94）

後醍醐の失脚を願う持明院側は「当今御謀反（後醍醐の拳兵）が差し迫っている」と通報。幕府は「君君たらずとも、臣臣たるべし」との二階堂道蘊の慎重論を抑えて、天皇以下の処分を決定した。

*吉田定房の密告 幕府が後醍醐の討幕意思を把握する決定打は、天皇の近臣、吉田定房からの急報であった。「主上世を乱さしめ給ふ。俊基朝臣張行するの

由」（鎌倉年代記裏書）という内容。定房は後醍醐の乳父で、「討幕は時期尚早」と説く奏状を提出するなど、強く自制を求めてきた。俊基を首謀者と名指すことで、天皇への危難を避けようとしたらしい。

(六) 阿新殿の事

(七) 俊基朝臣を斬り奉る事

鎌倉・葛原岡で日野俊基を斬首（p108〜112）

俊基は辞世の頌を残して葛原岡の露と消えた。立会った郎従が、北の方への遺書と遺骨を抱いて帰京した。

(八) 東使上洛の事

護良、父帝に南都への避難を建言（p114〜116）

後醍醐を逮捕する幕使の入京情報を掴んだ大塔宮護良親王は「直ちに南都に脱出し、近臣を替え玉として比叡山に向かわせるよう」後醍醐に上奏した。

(九) 主上南都潜幸の事

天皇、東大寺を経て笠置山へ（p116〜118）

後醍醐は、夜中、女装して御所を脱出、「木津の石地蔵」から奈良に入り、東大寺東南院の聖尋僧正を頼った。しかし、寺内の幕府派を警戒して、山城の和東へ。そこも籠城には不向きと分かり、笠置山に入った。

(十) 尹大納言師賢主上に替り山門登山の事

三七天皇と知らず、衆徒は大奮闘（p118〜122）

天皇来山の報で、比叡山の山上、山下の衆徒らが集結し、坂本に攻め寄せた六波羅軍と激しく戦って、緒戦には勝利した。護良、宗良両法親王は日吉大社の八王子山に旗揚げして、衆徒を鼓舞した。

(十一) 坂本合戦の事

偽装がばれて衆徒は四散（p129〜132）

天皇の居場所を西塔から東塔に移す際、衆徒に顔を見られて偽装が露見、興ざめた衆徒はたちまち四散した。両法親王も山を離れ、護良は十津川方面をめざし、宗良は父帝のいる笠置山に向かった。



木津の石地蔵（木津川市山城町泉橋寺）